

rongorongoro

茨城キリスト教大学
文化交流学科

茨城キリスト教大学文学部文化交流学科 〒319-1295 茨城県日立市大みか町6-11-1 TEL 0294-52-3215 FAX 0294-53-5864

青年海外協力隊 特別な技術がなくても大丈夫

齋藤 聖二

04年10月26日、国際協力機構（JICA）の協力を得て、青年海外協力隊の活動に関する特別講義を開催した。

これまで「JICA II ジャイカ」という名前は聞いていても、それは何か手に職のある人、技術者たちが途上国に赴いて、その技能を伝えたり指導したりする海外援助団体だと思っていた人が多いのではなからうか。今回の説明会は、何の技能もない人でも、立派に途上国の人々への援助行為ができるのであり、そういう人たちがほとんどジャイカに応募してほしいということとを、みんなに伝えるものだった。たとえば、日本の文化を教えたり、現地の子どもたちと交流したりするだけで、その人々の視野を広げる役に立ち、みずからを相対的に見直す視点を与えることになるわけで、ちゃんと「教育的」な役目を果たすことになる、というようになっていた。そ

もそもジャイカというものは、「人を通じた国際協力」を目的とした活動団体であるのだから、物やお金でなく、人間が直接途上国に行つて協力活動をすれば、それで十分意味があるわけだ、とあらためて理解させられた。まずはそんな風な話を聞いて、そのことを説明した簡単なビデオを見せてもらった。看護やスポーツや環境保護活動をしている人たちが出てきて、「国際協力」をしたいという気持ちさえあれば、現地に溶け込みながらいろいろな「協力」活動ができるのだと言っていた。年に春と秋の二回の応募の機会があることや、過去の試験問題が自由に閲覧できることなど、そして合格後の日程などについて、ビデオに続いて説明された。

ICファクトリーについて

学科主任・森謙二

文化交流学科が中心となつて、「ICファクトリー」という学生が行う起業を手助けする組織を二〇〇四年九月に立ち上げました。これから一段と就職の状況が厳しくなること、働く意味を確かめること、積極的に社会と関わりを持ちこれからの人生設計を考えてもら

うこと等、この組織の立ち上げやこれからの運営に期待するものが多々あります。現在、十数名の社員がいます。現在、ICファクトリーでは、日立市で行っている「ヤング商人」の事業の一環として日立多賀駅近くに開かれた「カウッパ」（旧東京ガスエネスタ多賀

この日の説明会のメインは、ついこの前まで「現地の子供と遊ぶ」という「国際協力」活動をしてきた女性の体験談であった。場所はポーランドである。意気込みと、現地での苦労と、挫折と、そして満足感とを自分で撮影したビデオを映しながら真摯に語ってくれた。彼女はまさに手に職のない人として、現地の子供たちに向かつて世界にはいるんな人種がいて、いろんな遊びがあつて、いろんな価値観があるということを実感させるといふ役目を果たしてきたのであつた。そのような役割は、たとえば農業技術を教えるというようなことと違って、とても難しい。何かを教えて、それが目に見えて成果が出るなら途上国の人も身を入れて教わる姿勢を持つだろう。でも、子供たちと遊ぶという国際協力では、現地の人たちだつてそう身を入れてこない。ちよつと想像しただけでその大変さはわかるというものだ。それを二年間やってきた女性の話は、なかなかスリルのあるものであつた。

文化交流学科の学生たちは、これという特殊技能を持つわけではないが、国際協力には強い関心を抱いている人が多い。これから一人一人が具体的な行動に出て行けるかはともかくとして、結構真剣に聞いていた学生が多いように見えた。今日の説明会が明日の行動につながってくれることを、心から願つてやまない。

05年度「国際協力」の講義が開講されます

学科カリキュラムの「国際協力」は諸般の事情で04年度は開講できませんでした。来年度は、国際協力機構の全面的な協力を得て、後期に開講できることになりました。キャンパスでの六回の授業と、ジャイカつくばセンターでの二泊三日の合宿研修をドッキングした形態。現場の専門家から直接話を聞けるほか、つくばセンターでは日本に研修に来ている途上国の研修生との交流も計画しています。乞つご期待。（藤田）

三月に韓国に行つて交流しませんか

今年3月7日（月）～11日（金）までの4泊5日で、韓国旅行を企画しています。ソウルの名所廻りやショッピング（明知大の留学生が案内してくれます）、韓国第二の都市大邱（テグ）で大邱カトリック大学の日本語専攻の学生と交流会（日本語でOK）などを行う予定です。費用は飛行機代・食事代など全部含めて6万円程度です。希望者は someya@cc.ac.jp までご連絡ください。（染谷智



新たな時代
に入った
日韓関係
日韓合同研究会に参加して
染谷智幸

4年10月19日（火）韓国の明知大学校龍仁キャンパスにおいて、明知大学（韓国）・茨城キリスト教大学（日本）・桜美林大学（日本）の三大学による共同研究会が行われました。本学から志賀市子先生（文化交流学科）、ディビッド・ヨシバ先生（現代英語学科）、染谷智幸（文化交流学科）が参加しました。テーマは「韓日大衆文化交流の現況と展望」で、韓日の古典小説の比較から、いま日本で話題沸騰の「ヨン様」ブームは何故起きたのかなど、様々なテーマについて話し合いました。

志賀先生は、アジア全域で起きている「韓流」を香港や台湾の立場から考察するというのが、中国文化研究者ならではのもの。ヨシバ先生は、インターネットをどう語学教育に活用するかという、これも先生の得意な分野。染谷は日韓のラプストリーイの比較という、これまた得意？な分野での発表でした。

例の「ヨン様」ブームは韓国では概ね歓迎の模様で、日韓関係はまた新たな時代に入ったという印象を受けました。写真は三人で龍仁キャンパスの近くにある水原城（世界遺産）に立ち寄った時のものです。一周するのに二、三時間はかかるという長大な城壁からは、水原の街並と周囲の青い山々が美しい景観を演出していました。

途中で寄った市場では、私染谷が日頃の韓国語勉強の腕を試そうと、地元のおジさんに唐辛子の値切り交渉を行うも、体よく追っ払われました。ソウルからバスに乗り高速道路を突っ走って一時間半、それでも料金は一六〇円でした。物価だけは日本と仲良くならないで欲しいと思ったのは私だけでしょうか。（染谷智幸）

夏休みに2年生5人組がベトナム・バックパック旅行を実行しました。フレッシュな感覚で、感想を書いてくれました。今度はインドだといっていますが、さて、さて……。

井上さやか

初めてのアジアへのバックパック旅行は、ベトナムでした。そこでは沢山の異文化に触れる事が出来ました。下準備として先生に話を聞いたり、本やベトナムのビデオなどを見たりしましたが、実際の現地は想像以上でした。

まず、お金に関して人を簡単に信じない事、タクシーに乗るにしても物を買うにしても一定の表示がないので、個人個人によって高くも安くもなるので気を抜く事が出来ませんでした。

そして、日本ではあまり見ない物乞いや衛生上の問題、水も生水は飲んではいけないし水も食べてはいけませんでした。

あとはなんと云ってもトイレです。かたちは日本と言う和式のような感じですが……。

あとは物価の安さです。ホットシャワーなどがついて、一泊一人8ドル程度、

また朝食付きでベトナムに滞在があるような豪華なホテルも一人10ドル程度で泊まりました。欠かせない水も一、五リが6000ドン(40円)程で買うことが出来ました。

内山由佳子

私が一番印象に残っている風景はのどかに広がる田園地帯だ。ここ茨城にも多くの田園が残っているが、ベトナムの田園は機械化されてなく三角の帽子をかぶって家族で手作業する姿はとてもきれいで、懐かしさを感じた。私達は南のホー



リ、椅子の悪さにも機嫌が悪かったが、気持ち良い風に当たっていると、そんなわがままも気にしなくなっていた。バスは長時間座り続け、途中で寄るトイレも

レには紙が用意されているところがまばら、道路にはごみが散乱している、食堂のおはし入れにくもの菓が……。改めて、日本はいかに清潔な国なのかを感じま

人の優越心のような気持ちがあることが少し悲しくもなりました。衛生面の他に、ベトナムの人々は、日本と比べるとゆつくり、のんびり、また自由な生活をしていると思えました。日中なのに、通りのカフェでお茶を飲んでいる人が結構いたので、今は勤務時間ではないのか？と不思議に思いました。

衛生面で衝撃的体験！

実際に歩いてみて衝撃だったのは衛生面の悪さでした。メコンデルタツアーで、水上食堂みたいところでトイレが下の川に通じているのを見た後に、川で洗濯・食器洗い、髪や赤ん坊まで洗っているのを見てしまいました。その生活が当たり前でも川の水が体内に入っていると思うと影響があるのではないかと不安に思いました。

小野さやか

考えることくらいです。ベトナムに行ったことで少しだけ考えが変化したように思います。

04夏バックパックカーinベトナム

チミン市から、中部より北部のホイアンへと向かう中でこのような風景を見た。ベトナムは日本のように細長い地形だが、温暖な地域である。だから二毛作も盛んで、北から南に移動するに連れ、稲が綺麗な緑色や、収穫の時期を向かえ黄金色に輝いてもいた。長距離バスでの移動は24時間バスに乗りっぱなしで、とても疲れるが、そのバスの中でベトナムの家や人々を観察したりするのも良い勉強であると思う。現地の人は街中を抜けるとエアコンを切り、

すがすがしいが、ベトナムの文化を感じるにはとてもいい経験だったと思う。

稲田麻里江

私がベトナムで一番衝撃を受けたのは、衛生面でした。衛生の問題は、ベトナムに限った事ではないだろうけれど、日本人から見たベトナムの実態はショックを受けられないはずではないでしょう。通りで、素手で料理を調理している人々、トイレ

した。しかし、同時に日本のきれいさに慣れてしまっている自分が、ベトナムのような発展途上国の汚れに拒否感を抱いてしまったことはなんだか情けなかったです。自分の中に、発展国

の単語を覚えていたと思えます。あのくらいの年なら学校に行つて、机のある教室で勉強ができるのに。この子たちは、勉強したくてもこうやってベンチの上でやるしかないのか……。二人に、「学校は行かないの？」とは聞けません。自分の行為が嫌になり、ここではこれが当たり前と割りきって食べたとしても美味しく感じました。お腹をこわすこともなく安心しました。

行ってみて感じたことは、日本はとてもきれいだということ。分かっていただけであらためて実感しました。だからって日本が優位に立っているという考えはできないと思います。私が今できることは衛生面の悪さが起こす影響について

横山瑛子

私の初めての海外旅行はベトナムでした。大学生のうち世界に出ておきたいと考えていました。

義務教育を受けられない子どもたちが

実際に私たちも水上マーケットが行われているメコン川？に降り立った。はっきり言って想像していた川と違って汚さに驚かされた。

▼メコンデルタ
▼水上マーケットにて
実際に私たちも水上マーケットが行われているメコン川？に降り立った。はっきり言って想像していた川と違って汚さに驚かされた。

のどかに広がる田園風景





とても臭くてなんとも言えなかった。でも人々はその川で生活をしてきた。歯磨き、洗顔、洗髪、洗濯、お風呂などなど……身の回りの生活すべてをその川でしていた。私は汚いと思ってしまったが彼らにとつてその川(水)は生活の源であるかのようだった。メコン川はベトナム人の生活になくてはならないものなんだと改めて痛感した。また川に建てられている家なども沢山あって凄と思った。魚の養殖場も訪問した。なかなかみる事ができないので面白かった。

水上マーケットでは船のてっぺんに自分たちが売っているものをぶら下げているのを目でわかるようになっていた。そこでは子供も大人も関係なく皆一生懸命働いていた。今ベトナムではかぼ

斉藤聖ニフランは デンジャラスで ワイルドでした

ちゃが人気あるのかかぼちやを売っている人を沢山目にした。

▼街で
朝から外食をしている人が多かった。外食といつてもレストランに入るのではなく屋台でワイワイと食べている姿を多く目にした。その光景はこの街に行っても目にする事で、彼らは朝から時間があるのだなあとと思った。

▼シヨックだったこと
ベトナム文化といつていいのだろうか……? どの街に行っても必ずいる物売りの子供。彼らはストリートチルドレンなのか? 観光客を見たらずつとついてくるし捕まえて離さない子供もいた。私は言葉も通じないし何も助けることは出来なかった。何も出来ない無力の自分に腹が立った。小さなうちからポロポロの服を着て大きな荷物を抱えている子供たちが街に溢れ返っていた。この現状を目の当たりにしてベトナムが抱えるこの問題を考える必要が私たちにはあると思っていた。

同じアジア人であるし同じ人間であるし平和、平和と騒がれている中で彼らの手助けをしたいと思つた。同じ人間なのに学校にも通えないなんて不平等であると思つた。神様は絶対にはないと思つた。だから私は何



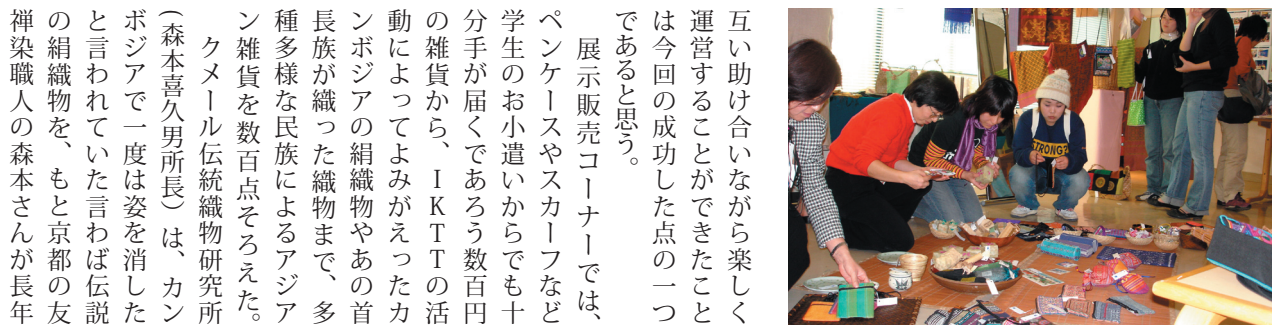
生まれたいことに感謝して彼らの分まで一生懸命勉強したりしなくてはならないのだ。そして彼らを助けられる人になりたいのだ。

▼アラビア語学校
旅行者がアラビア語学校に通う子供たちの前でボールペンを出したときのこと。一斉に子供たちは何十人とその旅行者を囲んだ。それはたった一本のボールペン欲しさにだ。はつきり言って驚いた。彼らは三人で教科書を見ているし筆記用具なんて小さな小さな鉛筆だ。でも一生懸命勉強している彼らはとても素敵だった。私はここで改めて物の大切さを知った。彼らに物と物を無駄にしないか出来なかった。

▼旅行を振り返って
毎日毎日が驚きの一日であった。でも私はベトナムに来て良かったと思つている。食事が合わなくて病院に駆け込んだりしたがそれもいい思い出だ。

アジアンバザールで アジアにふれた

佐藤 嘉洋



私は価値観が変わりました。それと資源の大切さを知りました。また日本がどれだけ豊かな国なのかも知れたし。ただ旅行に行くの

昨年の一二月二日、三日の二日間にわたつて行われた学園祭で、アジアン・バザールを大学一〇号館一階にて開催した。

タイやカンボジア、ベトナムなどから先生や学生たちが仕入れてきたエスニックな香りいっぱい品々を展示販売し、ベトナムコーヒーやアジア茶など約一〇種類のアジアンテイーを喫茶店として提供。他にもアジアの民族衣装を着ながら写真を撮るコーナー(コスプレ+プリクラ)、日本語教育ボランティアやカンボジアのクメール伝統織物研究所(IKTT)に関するパネル展示、映像ディスプレイなど。アジアンなお香の香りが部屋全体に漂い、東南アジアののどかな風景が映像ディスプレイによって映し出され、それに合った曲がゆつたりと流れる中で今回のテーマでもある「アジアの美」を感じながら作業を進めていった。

第一回目となった今回の企画には、藤田・柏原・岩崎先生をはじめ一〇名程の学生が参加し、それぞれが各担当に別れながらも、お



互い助け合いながら楽しく運営することができたことは今回の成功した点の一つであると思う。

展示販売コーナーでは、ペンケースやスカーフなど学生のお小遣いからでも十分手が届くであろう数百円の雑貨から、IKTTの活動によってよみがえったカンボジアの絹織物やあの首長族が織った織物まで、多種多様な民族によるアジア雑貨を数百点そろえた。クメール伝統織物研究所(森本喜久男所長)は、カンボジアで一度は姿を消したと言われていた言わば伝説の絹織物を、もと京都の友禅染職人の森本さんが長年

現地で活動し、復興させた団体である。二〇〇四年度のロレックス賞にも輝いている。

喫茶店コーナーではベトナムコーヒーが一番人気で、専用のカップやお皿を洗つても洗つてもお客さんの注文に追いつかないほどであった。他にもアジア茶や中国のお茶などが次のストックを確かめながら対応していたほど良く出た。子どもにはカリン茶が好評だった。

プリクラコーナーでは、チマチヨゴリを身にまといたり、友達同士でチャイナドレスを着てみると、思い思いのコスプレで写真を撮り、その場でプリントアウトするというプリクラを手にとって楽しそうに見える方が多かったように見えた。プリクラの機械はどこに行ってもあるが、アジアの民族衣装を着ながらのプリクラが撮れる場所は他にないはずである。

二日間を通して会場は年配の方から幼稚園生くらいの子どもまで、老若男女を問わず大勢の人でにぎわった。展示していた商品の方

も売れ行きは良く、売側は食事の時間もとれないほどだった。そこまで頑張つたおかげか、展示販売コーナー、喫茶店、プリクラコーナーの売り上げを合計すると、来年の仕入れ時の資金に回せるほどの売り上げだった。普段の生活ではあまり見られないような商品の販売やデジカメで撮った写真のプリントアウトの仕方、レジでの会計など、慣れない作業に戸惑う場面もあったが、お店に来てくださった方の多くが和やかな表情をしていたことが思い出される。それぞれの地域から生み出された織物や民族衣装に直に触れることができ、言葉で表現することが難しい独特な色使い、模様、さわり心地を体験することができ、貴重な経験を積むことができた。

初めてのことで戸惑う部分も多かったが、反省する点は反省し次回につなげていければと思う。

カンボジアで 日本語教育 ボランティア

福田 佳代子 文化交流学科四年次

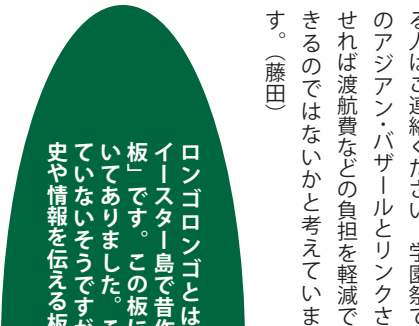
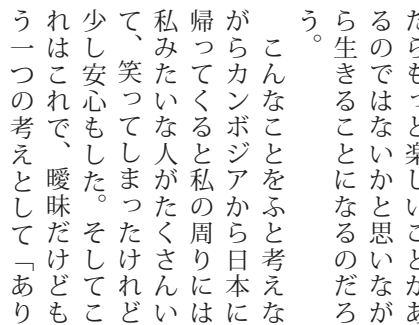
二〇〇四年八月三十一日夜、初めてカンボジアの首都プノンペンに降り立った。飛行機の乗り換えもあり、茨城を出て一五時間後くらいにようやく、くたびれてホテルに着くと、他のメンバーより一日早く現地入りした私をはじめに迎えてくれたもの、それは一匹のヤモリだった。カンボジアに来たということを実感した。

その二日後から「カンボジア日本友好学園」での生活が始まったが、その生活



と、最初はシャワーがなかったり、食器をいちいち熱湯で消毒してから使ったり大きなムカデやゴキブリと一緒に水浴びをしたりと、日本でそんな状況になったら耐えられそうもない生活だった。

しかし、はじめにホテルのヤモリ一匹で驚いていた私が、このプログラムの終りにはそんなことは全然苦にならなくなっていたこと



はとも不思議だった。ヤモリが部屋に二〇匹いてもかわいいと思えた。カンボジアにいると汗や泥や虫なんか全部自然のなかにさらさらと溶け込んでいってしまうような気がした。

上級生の生徒は、こっぴどくもまた恥ずかしがりやで、しかも下級生の生徒よりは落ち着いているから比較的静かな授業だったけれど、でも指名すると嬉しそうに

答えてくれたり、カンボジアのことについて聞くとはりきって答えてくれたり、中には面白いことを言ったり、授業に笑いを提供してくれ

る生徒もいて和やかな雰囲気

で授業ができた。

なぜそんなに勉強するのか

また、全ての生徒に共通して言えることは、とにかくみんな学校が好きだということだ。勉強に対する意欲や関心がとても高いし、そのせいか授業中の生徒の目が本当に見てわかるくらいキラキラして、それは教える立場の私としては授業前の準備の苦労なんか一気に忘れてしまえるくらい嬉しいものだった。

彼らがなぜそんなに勉強をするのか、何人かの上級生の生徒は自分が一生懸命勉強することで「いい仕事」について国を発展させたいからだと言っていた。いくらか勉強したからといって将来「いい仕事」に就けるかは全くわからないのだけれど、でもそれを知らながらもみんな一生懸命勉強していた。それがその生徒の夢だからだ。

出た。その人はニュージールランド人だったのだが、「なぜ、アジアの人は大変な思いをして勉強したり仕事をしたりするのか？ 自分には全く理解できない。人生楽しまなきゃだめだよ」と言っていた。またある人は「日本ではフリーターはなぜいけないの？ ニュージールランドじゃむしろいいことなのに」と言っていた。私はこんなにも違う考えが、しかし本人達にとってはどちらもそれぞれ正しい生き方として存在し得ることに感心してしまった。ただ、どちらにしても本人達は楽し

んでいるのだからその点で問題はないのだけれど、しかし私の考えはというと、このどちらの意見もわかる気はして、でもどちらかをとることもできなくて、考え出すとなんかよくわからなくなってしまう。あえてどちらかを選んでもきつと本気では楽しめなくて、いつももう一方にはもしかしたらもっと楽しいことがあるのではないかと思いつながら生きることになるのだろう。

こんなことをふと考えながらカンボジアから日本に帰ってくると私の周りには私みたいな人がたくさんいて、笑ってしまったけれど少し安心もした。そしてこれはこれで、曖昧けども一つ一つの考えとして「あり

なんだな」と思った。カンボジアで、くだらないことかもしれないけれど、こんなようなことを少し考えられてよかつたと思う。

参加できて本当によかつた

ずいぶん本題からずれてしまったが、とにかく私はこのプログラムに参加することができて本当によかつたと思っている。最後の日に一緒に元気に写真を撮ってくれた生徒たち、アイスを買って来てくれた生徒たちや写真を持ってきてくれた生徒たち、わざわざ見送りに来てくれた生徒たち、そして私達の授業に来てくれた全ての生徒に感謝している。みんなのことが大好きで別れるのは本当に寂しかった。また機会があれば是非「カンボジア日本友好学園」に行きたいと思う。

また、このプログラムを企画し、このプログラムを実施したいと考えています。関心のある人はご連絡ください。学園祭でのアジアン・パザールとリンクさせれば渡航費などの負担を軽減できるのではないかと考えています。(藤田)

地域新聞(紙名は現在検討中)は、地域の方々に寄付をお願いして資金を調達する予定です。「ユイマール塾」は、一週間二回(一日一時間〜二時間)で月四〇〇〇円の月謝を考えています。大きな黒字は考えていませんが、わずかも人件費が出るように努力していくつもりです。

みなさんも、ICファクトリーに参加してみませんか。

ICファクトリー・続き

新しい二つの事業が企画され現在準備中です。三月には、ミニコミ紙(地域新聞)を刊行する予定でその準備に入りました。この地域新聞では、地域に関すること、大学に関することを中心に多くのことを発信していきたいと考えています。また、「ユイマール塾」も開設し、地域の子どものための交流も始たいと考えています。「大学生と一緒に勉強しよう」を合言葉に、子どもたちに勉強を教えながら地域へ貢献したいと考えています。

ロンゴロンゴとは南太平洋ポリネシアのイースター島で昔作られていた「物を言う板」です。この板には文字のような物が書いてあります。この文字はまだ解読されていないようですが、これは島の人々に歴史や情報を伝える板でした。